

# マルクス経済学の21世紀展開の試み

## —南克巳の自選著作集プランについて—

後 藤 康 夫

### はじめに

南克巳（1931年—2019年）が、これまでの発表論文・報告を編集した自選著作集プラン（全3篇1巻）を作成し（1999年末）、ごく周辺に配布したことは知られている。ここ近年、マルクス経済学の21世紀展開をめぐる、南の問題提起に関心が向けられていることから、この機会に、筆者の手元にあるものを公表し、広く議論に供することとしたい。

周知のように、南の論文は“難解で理解しづらい”との声もあり、さらに、このプラン原稿もA4サイズの大きさをわずか3枚、その内訳は1枚が主要論文・報告リスト、2枚が本文ということからも、理解を深めるならかの手立てが必要になると思われる。そこで、本稿は、次のような構成をとることとする。前段に、南の提起を受け止めている論者2人（北原克宣、藤田実）の見解、そして南の問題提起の基本線について筆者が素描した解題を置く。そのあとに、南の自選著作集プラン、そして南の全体像が一望できるように、参考資料として、「主な論文」リスト（1956年—1995年）、ならびに「主な報告」リスト（1996年以降）を置く。

## I マルクス経済学の21世紀展開の始まり 一南の提起は、いま、どのように受け止められているのか

最初に北原克宣論文「マルクス経済学の現代的課題」から見ていこう。マルクス経済学の醍醐味と現状、そこにおける南の位置と方法を、次のように端的に語る。

「資本主義世界の変動を構造的かつダイナミックに捉えたうえで展望を示す視角は、マルクス経済学ならではのものだったと言える。この醍醐味が失せてきていることが近年のマルクス経済学の停滞の一因でもある。／… こういったなかでもマルクス経済学の醍醐味を伝える研究成果も見られている。冷戦体制解体と資本主義世界再編を検討し「資本主義のアメリカ的段階の『終焉』」を提起した南の分析…である。／南…のような分析ができるのは、マルクス、エンゲルス、レーニンの分析において通底していた手法、とりわけ弁証法＝唯物史観に基づく分析による…生産力基盤の変化を的確に捉える視角である」<sup>1)</sup>。

では、北原は、南による「資本主義のアメリカ的段階」の生産力基盤分析において、どこに意義を見出しているのだろうか。その独自の「再生産構造論的分析視角」を次のように深く掘り下げる。

「再生産構造論は、マルクス・エンゲルス『資本論』第2巻における資本の再生産表式にもとづいて山田盛太郎が日本資本主義分析に応用した手法を継承したものであるが、南の特徴は、I部門を在来重化学工業を表すIA部門と、軍事的性格を強くもつ新鋭重化学工業IB部門（具体的には、電子、通信機器、航空＝宇宙、兵器、研究開発（原子力）部門を取り上げ

---

1) 北原（2017、139頁）。

ている)に再分割したところに独自性がある。南がI B部門を抽出したのは科学革命の結果が生産=技術史上の新段階を体現していると捉えたからであるが、より根源的な理由としては、…新鋭重化学工業が『冷戦』のもとの競争のなかで生み出され、『科学革命』と結びつくことで、資本主義の成長の限界を突破する役割を果たしていることを明らかにするためである。…これが資本主義再編の原動力ともなっている…このような分析は、南ならではのものであるとともに、本質を鋭く描き出している点で継承しなければならない視角と言えよう<sup>2)</sup>。

このように、南が新たな生産力展開として新鋭重化学工業I Bを抽出したゆえんを、その「根源」にまで深く迫り、20世紀の「科学革命」が有する「資本主義の成長の限界を突破する役割」に見出す。ここに南の独自性が確定される。

かくて、北原はマルクス経済学の21世紀展開の方向を、南の提起に即しながら、こう指し示す。

「2008年のリーマンショック以降、世界の構造は大きく変化しつつある…再び資本主義世界の再編が始まった。それは、生産力基盤において、南…が分析した『ME=情報革命』の延長線上にある<sup>3)</sup>」。

が、いまや、インターネットの基盤上で、「ネットワーク化がもたらす新たなコミュニケーション」段階に入った、この生産力基盤を分析し、「資本主義世界再編の展望」を見透そう、と呼びかける。

こうした北原の呼びかけに呼応するかのように、経済理論学会の機関誌『経済理論』（第58巻第2号、2021年7月）において、南が提起した社会編

---

2) 北原 (2017, 131-132頁)。

3) 北原 (2017, 139頁)。

成の新たな連帯原理（公開・共有・自律分散）の「ネット新世界」論（1999年）に全面的に依拠した特集テーマ「21世紀社会主義を切り開くネット新世界」が組まれているのは、大変興味深い。そこでは、藤田実が論文「ネット段階の資本主義経済と社会変革への展望」において、次のように、南の「ネット新世界」論を参考にしていると明示する。

「ネット発見，ネット対応という用語は，1990年代後半のインターネットの急速な普及によるネット新世界の形成を，ネット先行（ポジ・本流—引用者）—ネット対応（資本の囲い込み・ネガ・逆流—同）—ネット包摂（ポジ・止揚—同）として位置づけた南克巳の図式を参考にしている」<sup>4)</sup>。

そして、「資本のネット取り込みとそれに対抗する民衆側でのネット対応＝社会運動の分析を通じて，新しい社会主義」を論じていく。とくに，構造の分析だけではなく，さらに踏み込んで，階級対抗と展望を「新しい変革主体とネット社会主義」として運動論までダイナミックに展開しているのが注目される。

このように見えてくると，マルクス経済学の21世紀展開に向かって，南の提起を受け止めた議論が始まり，ひとつの方向が示されつつあると言ってよいであろう。あらためて，南の提起の基本線を筆者なりに探ってみよう。

## II 南の問題提起の解題素描—基本線：20世紀科学革命（科学的労働）を媒介とする新たな生産力体系・I Bと新たな変革主体像—

南の研究の意義は，なによりも，著作構想に結実することになる現状分析にある。南の師である山田盛太郎に独自の方法「再生産構造という視角

---

4) 藤田（2021，31頁）。

からの歴史の課題との対決」を、第二次世界大戦後の新たな現実に独創的に具体化し、発展させる試みである。その分析構想の壮大さ、切り込みの鋭さ、そして具体的分析のち密さは、余人の追隨を許さず、そこから生み出されてくる作品は、現象の記述や理論の解釈とは無縁の「歴史・具体を通した生きたマルクス理論」の創造と言うべきものである。

そうした現状分析に立ち向う根本姿勢は、早くも冷戦対抗絶頂の1960年代中葉、論文「『資本論』体系の発展としての『帝国主義論』」の末尾「結びにかえて」において、高らかに宣言されていた。あらためて原点を確認する。

「あたかも、現下の情勢は、『冷戦』という世界史的に新たな対抗とともに開幕した戦後特有の熾烈さをもって、ほかならぬこの観点（山田の方法—引用者）の、ためらうことのない継承を、だがむろん『方法』という死んだ文字ではなく、一変した状況の斬新な分析のうちに創造的に息づく『生きた魂』として、要請しているかに見える」（1966年、66頁。以下、南の作品発表年と頁を記す）。

南みずから預言の如く宣した「『冷戦』という世界史的に新たな対抗」の「斬新な分析」こそ、その数年後、冷戦帝国主義分析のキーカテゴリー、I Bとして、見事に示されたところである。南提起の基本線を、「斬新な分析のうちに創造的に息づく『生きた魂』」の検出を通して、素描していくことにしよう。

#### A 新たな生産力創出と展開：20世紀科学革命を媒介とする「I Bの三段跳び」—「無限に進展する潜勢力」の具体的分析—

周知のように、南は、20世紀現代物理学革命の技術的達成たる核とエレクトロニクスを支柱とし、それに新鋭化学・素材部門をあわせた原子・電子・宇宙産業の体系を、在来重化学工業（鉄が「産業のコメ」）から区別

し、これをマルクス再生産論の基礎カテゴリー、生産力を指標する部門分割のⅠ（生産手段生産部門）とⅡ（消費手段生産部門）に準拠し、あらたにⅠB体系として分離・抽出する（Ⅰを在来ⅠAと新鋭ⅠBへの再分割）。ここで決定的に独創的なのは、この新たな生産力ⅠBを起動する20世紀科学革命の内在的性格を根源から問い、理論物理学者・坂田昌一の「極微の世界」から「極大の世界」までの広深・無限の「多層世界」を総合的に捉える自然弁証法的世界観（坂田「現代科学・技術の人類史的意義」『岩波現代講座 第2巻』1963年）に依拠して、「私的＝資本主義的＝国民的枠組をこえて無限に進展する潜勢力 potential」と規定し、これをマルクスの科学的・精神的労働を内容とする「一般的労働 allgemeine Arbeit」において概念化することにある（1969年、72頁。1970年、20頁）。

この「無限に進展する潜勢力」は研究開発段階ごとに生産力として資本主義の自己規制（私的・階級的・国民的な所有と支配の枠組）を突破し、屈伸的に飛躍していく。その具体的な追求が、南の現状分析となり、その成果はダイナミックな「ⅠBの三段跳び（「軍事的統体」→「新産業の基軸」→「ネット新世界」）」の形をとる。

1（ホップ）：核・軍事革命（1941マンハッタン計画－60's）。冷戦世界戦略を担う核・ミサイル軍事力のグローバルな体系WWMCCS（World Wide Military Command & Control System）の形をとる「軍事的統体」（冷戦帝国主義の編成・解体基軸。アメリカ独占）。

2（ステップ）：ME・情報革命（1970's－80's）。71年LSIを起点とするマイクロ・エレクトロニクス化の進展によって、これまでの「軍事埋没型」から民需生産力としての本格的な形をとる「新産業の基軸」へ（新たな「産業のコメ」としての半導体。その地域的展開線としてのアジア化・アメリカ独占の解体：米－日－アジアNIESの complex の形成と解体→中国化へ）。

3（ジャンプ）：ネット・コミュニケーション革命（1990's－）。資本と国家の止揚に向かう「共有と分散」の新たな労働・生産様式の形をとる「ネット新世界」へ、世界コミュンへ（科学的労働が直接的に生産力。資本

主義の解体と止揚の大旋回・変革基軸。→「資本主義世界の共産主義的再生産」の総過程・「資本主義世界のアポカリプス」の全機構的分析へ。

**B 新たな変革主体像：科学的労働を媒介とする階級対抗－「秒刻みのコンピュータ・システム下の『モルモット』たち」から、その反転，『『社会的個体』による世界大の連帯と共同のコミュニティ』へ－**

I B カテゴリーは、同時に、この生産力体系の担い手をめぐる階級対抗・変革主体像を内包する。南は、『資本論』における機械制大工業段階の「全面的に発達した個人」への欲求と、旧式分業の再販・専制的統轄形態との対抗、「絶対的矛盾」に着目し、その直接的な展開形態を、研究開発に即して鮮やかに描き出す。

1 起点：「秒刻みのコンピュータ・システム下の『モルモット』たち」

「マルクスがすでにあの段階で、変革への唯一の歴史的『通路』と喝破した、かの絶対的矛盾－『死活問題』としての『全面的に発達した個人』への欲求（いまや、それは、『能力開発』・教育訓練『計画』が『R&D計画』とともにトップ・マネジメント直属の、さらに政府の、枢要の長期戦略的施策となる地点にまで進む）と、他方その『専制的』統轄形態、『労働過程の社会的統制の資本主義的戯画』としてあらわれる旧式分業の組織的再販（秒刻みのコンピュータ・システム下の『モルモット』たち）とのあいだの対抗も、いまや極限的かつ全過程的なものとなる」（1970年、23－24頁）。

2 深化：「コンピュータ・プログラム＝非人格的・非人間的なコンピュータ・ファッション」

「それはいまや集積が及ぶ少なくとも世界の主要諸国の労働＝研究

＝管理陣全体の全人的資質の向上にたいする要求と、…いまや世界的スケールで組織されるだけでなく、またその様式においてもあからさまにロジスティクス＝兵營的となり、コンピュータ・プログラム＝非人格的・非人間的となる—コンピュータ・ファッショ！との対抗も、…いまや極限的かつ全過程的＝世界的なものへと発展する」（1974年、89頁）。

それから四半世紀後の20世紀末、南は、70年代に描き出した「全人的資質の向上要求」と「コンピュータ・プログラム＝非人格的・非人間的なコンピュータ・ファッショ」という極限的な対抗が、まさにコンピュータ・プログラムの開発方式において、ネット上における草の根のボランタリーな主体のグローバルな登場によって突破されていく事態に「驚嘆」するに至る。

### 3 反転：『社会的個体』としての労働者の自己解放への展望」（「共有にもとづく個体的所有の再建」）

ネット上における草の根のボランタリーな主体のグローバルな登場、なかでも、その先陣を切るオープン・ソース「リナックス」の活動のうちに、科学的労働の「文字通りの世界大の連帯と共同のコミュニティ（「社会的個体」としての労働者の自己解放への展望）」（1999年、2頁）を見出す。そして生産様式としての「自由な諸個人の連合体」・「共有にもとづく個体的所有の再建」<sup>5)</sup>の先行的成立（連帯の3C：communication- collaboration- commune）を宣言する。ここに、変革主体像が『資本論』における機械制大工業段階の「全面的に発達した個人」から、『経済学批判要綱』における科学的労働段階の「社会的個体」（価値法則の止揚）へと、「人類史的飛躍」

5) このテーゼを、「社会主義の理念」として強力に押し出した平田清明の「歴史理論としての『資本論』」については、後藤（2019）を参照されたい。



を遂げることになる。

こうして、初発から科学的労働とコンピュータ・システムへ着目してきた到達点が確定され、21世紀世界への「通路」（「Netにもとづく新しいInternatinalの再建へ」）が切り拓かれることになったのである<sup>6)</sup>。

### C 総括：新たな人類史的過渡期（人類社会の「前史」の終わりと「本史」の始まり）を切り拓くネット新世界の「主体の革命」と、その「諸個人」の世界史的立場づけ（基本問題）の提唱

2002年、南は、最期となる報告「情報革命の歴史的位相—インターネットの生成史に照らして」において、オープン・ソース「リナックス」とネット的社会運動としての「シアトルの闘い」のうちに、これまで展望されてきた「将来社会の物質的前提の成熟」及び「主体の陶冶」の次元に解消しきれない「主体の革命」を洞察し、この「主体の革命」を担う「諸個人」の世界史的立場づけを呼びかける。

「情報革命の『本流』の確定こそ、この革命が担う人類史的過渡期の突きつける歴史の主題（資本主義世界のアポカリプス！）に迫るためのまず第一の要件、否、第一の抛りどころをなす…その意味で、このネット上にあらわれる新たな歴史的主体（諸個人）の評価、立場づけが、遠くは歴史に登場する“individuals”の役割との関連で（『古典古代の最盛期』→階級社会の形成と『近代の初頭』→階級社会の完成、国家の諸類型の2つの場合との対比）、近くは《18世紀末大旋回》以来の『近代プロレタリア』の世界史的事業（階級社会と国家の止揚）とのかわりで、主題追求の全行程をつうじて問いつづけられるべき基本問

6) 21世紀に入ると、ポール・メイソン（2017）が、オープン・ソース「リナックス」の開発方式のうちに『経済学批判要綱』の科学的労働（一般的知性）の現代的存在形態を見て取り、これを「人間の自由」としての「解放された行動」（「分散と協働の新しい生産様式」と定式化し、「ポスト資本主義プロジェクト」を呼びかけている。かくて、「通路」は人々の自由で解放された多様な活動を通して「現実に存在する通路」となってきた。

題を構成する」(2002年レジュメ, 8頁)。

ここに、山田盛太郎が『日本資本主義分析』(1934年)で提起した展望、その最後の言葉「プロレタリアートの主体形成=陶冶」を、「1930年代の機械制大工業論」と歴史的に限定し、20世紀の科学革命・科学的労働を媒介に包摂・乗り越えていく、南の「創造的に息づく『生きた魂』」の最後の言葉、真骨頂をみることができる<sup>7)</sup>。

もちろん、南が最後に提示した「ネット新世界」論は、あくまで21世紀世界の「分析構想」の次元にとどまる。残された課題は、ポスト冷戦という名の世界的リストラ・「資本主義世界のアポカリプス」の再生産構造を、「資本主義的世界の共産主義的再生産」の総過程として全機構的に分析(ポジ・本流ーネガ・逆流ーポジ・止揚)することにある。開始された「新たな人類史的過渡期」を人類史の「前史」から、その「本史」への大過渡期として本格的に軌道位置していくのは、次世代の果敢な挑戦、この一点にかかっている。

それでは、南の自選著作集プランに進もう。

### Ⅲ 南の自選著作集プランー著作タイトル『冷戦体制の解体とME =情報革命ー20世紀末大旋回のゆくえ(どこへ行きつくか)』

《リスト・アップされた論文と報告。注記:第1篇やメイン、下線などの表記は、後藤の加筆。論文の囲みは南のもの》

7) ちなみに、「主体の革命」を担う「諸個人」の世界史的位置づけに関して、山田盛太郎の「構造」論と大塚久雄の「主体」論の統一を試みてきている石井寛治(2015)によって、「発展段階論の現代的再生に向けて」(「基本法則論から世界システム論へ」という構想のもと、「企業や国家から少なくとも精神的に自立した市民たちの世界的規模での連帯」を担う主体として、そして「直接生産者が生産手段の所有を社会的・民主的なかたちで回復する過程」を担う主体として「世界市民」(320頁、元となった報告は1999年)が提起されているのは、大いに注目される。マルクス経済学の21世紀展開は、「変革主体」像の視点からも、つまりは本来的な「人間解放」論として始まっていると言うことができる。

1966年「『資本論』体系の発展としての『帝国主義論』『マルクス経済学体系』第3巻『帝国主義論』有斐閣。

1969年「アメリカ資本主義の戦後段階—『1963年工業センサス』を中心に」『土地制度史学』第45号。

第1篇（メイン）

1970年「アメリカ資本主義の歴史的段階—戦後＝『冷戦』体制の性格規定」『土地制度史学』第47号。

1973年「『資本輸出』の戦後＝アメリカの段階—米商務省『1966年世界企業センサス』から」『土地制度史学』第60号。

第1篇（脚注部分を解説的補足として利用）

1974年・75年「戦後資本主義世界再編の基本的性格—アメリカの対西欧展開を中心として」法政大学『経済志林』第42巻第3号，第43巻第2号。

1976年「戦後重化学工業段階の歴史的地位—旧軍封構成および戦後＝『冷戦』体制との連繫」『新マルクス経済学講座』第5巻『戦後日本資本主義の構造』有斐閣。

1977年「山田盛太郎『日本資本主義分析』（文庫版）解説」岩波書店。

1981年「山田先生と戦後段階＝鉄鋼分析」『土地制度史学』第93号。

第1篇（サブ）

1986年「『冷戦』体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義—ME化とアジア化を軸線として」1986年土地制度史学会秋季学術大会『報告要旨』。

1991年「湾岸戦争と国連帝国主義—現代『ボナパルト』考」経済理論学会・湾岸戦争即時停戦アピール有志の会『湾岸戦争を問う』勁草出版サービス。

第2篇（サブ）

1994年「ME＝情報革命の基本的性格—『ポスト冷戦段階』への基礎視角」慶応義塾大学『三田学会雑誌』第87巻第2号。

第2篇（メイン）

1995年「冷戦体制の解体とME＝情報革命」『土地制度史学』第147号。

第2篇（サブ）

1996年「2つの新世界—情報化の現段階によせて（どう読むか）」千葉大学法経学部。

第2篇（サブ）

1997年「グローバリゼーションと資本主義のゆくえを考える」基礎経済科学研究所。

第3篇（メイン）

1999年「ポスト冷戦10年の経済的帰結—情報革命と金融革命の世界史的連繫に着目して」ポスト冷戦研究会。

《本文》

## 標題 戦後冷戦体制の解体とME＝情報革命—20世紀末大旋回のゆくえ（どこへ行きつくか）

### I 基本課題と方法＝視角 [別刷《歴史図式》参照]

戦後世界を半世紀の長きにわたって枠づけてきた冷戦体制の解体で始まる世界的規模での再編過程 [リストラ] (1971→81→91=95⇒を各環節として進行をはじめめる人類史的プロセス), その性格と帰趨の見極めが本書の究極の課題だが, ここでは, その過程を18世紀末の大旋回 [→産業革命と資本主義の確立へ] と19世紀末の大旋回 [→独占と帝国主義の段階へ] に続く近代資本主義史上の第3の大旋回の開始と捉え, 前2者にたいする今回のその独自の歴史的位相を, 端的に, 資本と国家の止揚へ向う巨大な(ミレニアムにふさわしい)世界史的＝人類史的過渡期の開始として論定すること, 直接の主題をその一点にしぼっていきいたい。

本書は, この課題を, 図式的にすぎるが, 20世紀が生んだいわば《2つの新世界》の把握を通じて, 2段＝2重に果たすことを期している。まず

近代資本主義の母国、旧世界ヨーロッパの危機（19世紀末大不況－I大戦）を母胎に、その同じ19世紀末大旋回が他面、新大陸に生み落とす《新世界》アメリカの成立と展開、そのもつ世界史的意義の独自の把握をつうじて、いわば歴史＝段階的に基礎づけること【「資本主義のアメリカ的段階」、その歴史的総括として単一の世界経済システムとしてはその最高＝最終を飾る「冷戦帝国主義」の規定→総じて20世紀資本主義を依然欧州ベースで概念し、アメリカをもその一変種としてヨーロッパ旧世界の延長線上でとらえる伝統的な把握のカラからの脱却の旅、さらに積極的には主題20世紀末大旋回への歴史的前提＝基礎としてのそのせん明へ】、また他方では、冷戦40年をつうじるその「アメリカ的段階の終焉」を新たな土壌（一個の掠奪的覇権国家への転落と起死回生の経済再生戦略への転換）として必然となる今回の20世紀末大旋回が、とりわけその世界史的推進軸となる情報革命と金融革命の「ポスト冷戦」下の連繫が生みだす、文字どおりの《新世界》、cyberspaceのInter Net原理＝形式による《新世界》としての開設とその新たな基礎上に登場する、軍事起源＝情報＝金融《新世界》、このもうひとつの《新世界》、そのもつ人類史的含意についての独自の把握をつうじて、いわば理論的＝実証的にせん明していくこと【当面の問題としてはこの《新世界》の先行的占拠＝「新独占」の形成、それをテコにその姿にあわせた（「グローバル・スタンダード」！）旧世界の全般的リストラの強制、つまりはこの人類史的過渡期の《資本主義＝アメリカ的ラウンド》の本格的起動と「21世紀型危機」の開始→総じて20世紀末大旋回下のこの事態をも、依然として独占と帝国主義の（むしろ経済学一般の）本来的概念（地上の世界ベース！）の延長線上でとらえんとする伝統的＝理論的枠組みのカラからの脱却の旅へ、さらにポジティブにはNet上に築かれるこの90年代的な主題、課題の焦点への肉迫へ】、以上がそれである。

## Ⅱ 作品の素材配置＝篇別構成

上の課題と視角にてらして、作品の素材配置は、やや篇年ののキライは残るが、次の3段＝3篇構成をとる。

第1篇は、〈20世紀末大旋回の歴史的前提＝基盤〉の見出しで、1969年発表－70年成稿の「アメリカ資本主義の歴史的段階－戦後『冷戦』体制の性格規定」を適宜改題してメインにすえ、それに1986年発表の報告レジュメ「『冷戦』体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義－ME化とアジア化を軸線として」をそえ、かつ主題の概念的＝方法的ポイントの解説的補足として、その点にひとつの力点を置いている1974－75年稿「戦後資本主義世界再編の基本性格－アメリカの対西欧展開を中心として」の脚注部分を適宜「引用」の形で利用＝配置する。

第2篇は、〈20世紀末大旋回の《資本主義＝アメリカ的ラウンド》への方向づけ〉の名で、94年発表、95年成稿の「冷戦体制解体とME＝情報革命」改題のものをメインにすえ、それにこのラウンドをつうじて新たな段階を画することになる情報革命（基調はなおNetでなく、コンピュータシステムの「パーソナル化」と「ネットワーク化」の革命的意義のせん明にすえらるる）関連の2作－「ME＝情報革命の基本的性性格－『ポスト冷戦』段階への基礎視角」（94年慶応大）、「2つの新世界－情報化の現段階によせて」（96年千葉大）、と講演原稿「グローバリゼーションと資本主義のゆくえを考える」（97年京都・基礎研）をそえる。

第3篇は、〈20世紀末大旋回の《資本主義＝アメリカ的ラウンド》の経済的帰結〉の名で、今年9月発表の「ポスト冷戦10年の経済的帰結－情報革命と金融革命の世界史的連繫に着目して」（ポスト冷戦研究会）の全部をあてる。その大略の構成は次のとおり。

- I 問題の総括的提示（歴史図式を中心に）
- 1 3つの世紀末と2つの基調
  - 2 この文脈のなかでの「ポスト冷戦10年」の独自の位置－人類史的過渡期の《資本主義＝アメリカ的ラウンド》, その歴史的意義と限界の開示
  - 3 総括－論点の集約
- II 理論的＝段階的考察－Net《新世界》の性格規定をめぐって
- 1 Net成立の歴史的意義にかんする3つの基本点
  - 2 Net新世界の資本主義・アメリカ的占拠＝包摂における基本問題＝基本矛盾
    - 1) 機械の資本主義的包摂＝利用の場合（『資本論』）との対比から
    - 2) 機械＝固定資本のうちに体现された一般的＝科学的労働の利用の場合（『経済学批判要綱』）との対比から
  - 3 論点総括＝集約－20世紀末大旋回＝人類史的過渡期の弁証法。Net先行－Net対応－Net包摂の弁証法。《新世界》の把握からその基礎上に成立する《新独占》の分析へ
- III 統計的＝基礎的実証－《新独占》の経営指標について
- A 前提－《新独占》Win-tel-Co.の位相の概観－旧独占との対比で
- B Net対応を軸とする2つの新経営領域（新世界）の展開
- 1 M&A-Dの新展開－Net対応の第1形態＝資本・競争関係のリストラ株式の通貨(corporate currency)化（その1）
  - 2 stock-based compensationの新展開－Net対応の第2形態＝雇用・階級関係のリストラ株式の通貨（賃金）化（その2）－(stock optionとstock repurchaseの相関)
- 《共通基盤－Net開設をベースとする一般的＝科学的労働の第3段階（社会的個体への展望）と経済＝労働トバクの結合》

## C 総括－新独占の規定のために

- 1 Netベースの情報＝金融《新世界》の形成史（70's-80's -90's）への一視角
- 2 金融革命の現段階（金融 Web－株式バブルの新世界）と「21世紀型危機」への3つの視点＝問題点
- 3 対外資本取引「バランス」の新形式7000億ドル＝（2000億ドル）＋5000億ドル（→1兆4000億ドルの対外債務累積）の示すもの－金融的規制＝バブルの《新世界》の総括的指標。基軸通貨＝ドル問題の新しい意味。
- 4 再生産構造＝産業構造のNet対応＝包摂－表式＝計画の新しい地平へ

## ＊補注（後藤）

本文冒頭に、[別刷り《歴史図式》参照]とあることから、参考として、その「歴史図式」を、掲載する。



《ひとつの歴史図式（アメリカに焦点をおいた）》 1999. 9. 25 ポスト冷戦研究会第1回総合報告資料

14 世紀末の文化革命 → 政治革命 (1647, 1776, 1789)



18 世紀末大旋回

19 世紀末大旋回

産業革命（機械と大工業）→ 産業資本確立と近代プロ形成。「独自の＝資本主義的」生産様式と資本による労働の實質的包摂の成立。  
重化学工業化＝独占＝帝国主義段階へ移行

《ヨーロッパ「旧世界」の危機（→ ロシア革命＝「戦争と革命の時代」）＝同時に「新世界」アメリカの成立【→ 資本主義のアメリカ的段階の差足＝「旧世界」再建（「相対的安定」）→ 冷戦体制包摂】とソ連の「一國社会主義」封じ込め、20 世紀型社会主義転化】》

1. I 大戦とロシア革命 → 29 年大恐慌 → 一國独資転化

2. II 大戦と中国革命 → 冷戦＝大陸の国家米（ソ）「体制的」独占＝冷戦帝国主義（冷戦社会主義）へ総括

資本主義経済の統一的世界編制としては最高（→ 最終）形態（最終の国際通貨体制としての IMF＝ドル体制の意味）同時に解体と 20 世紀末大旋回への動軸の built-in (20 世紀科学革命と冷戦と軍事 1B との連結＝展開線)

20 世紀末大旋回

冷戦体制解体と冷戦後世界再編を軸とする新たな「人類史的過渡期」の開始（情報革命の展開線 Net 先行＝Net 対立＝Net 包摂を基本軌道とし、資本と国家の止揚へと向かうそれ、Net にもとづく新しい International の再建へ）

《冷戦体制解体の世界史的帰結 → 20 世紀型社会主義の終幕と資本主義のアメリカ的段階の終幕》（1 個の権力的新権国家転落、総じて金本位制崩壊）  
《29 年大恐慌 → 民族国家圏類（核冷戦体制移行）の流れを締めくぐる資本主義世界「総括」の最後の支柱＝防壁の撤去、同時に情報通信革命と世界市場革命との世界史的相関の開始》

1. 1971-81-91 冷戦＝IMF 体制解体過程【体制間軍事対抗の強化と体制内統合の負担（「日本化」→「アジア化」）の相関、そのもとの NE＝情報化と金融自由化＝国際化起動 → レーガン・ブッシュへの総括（労働制圧とサライサイド＝リストラ、財政から金融への転換）

2. 1991-95- ポスト冷戦戦略下での情報＝金融革命の新段階移行 —— 『Net の発見』＝民営化（95 →）を一大面期とする情報通信＝金融《新世界》の形成、その《新世界》の独占的掌握（「新独占」）をテコにその姿にあわせた（「グローバール・スタンダード」）旧世界の全般的リストラの強制、つまりはこの「人類史的過渡期」の《資本主義＝アメリカ的ラカン下》の本格的起動と「21 世紀型危機」の開始へ。

#### Ⅳ 参考資料 一南の主な論文と報告のリスト（作成は後藤）

##### 1 【主な論文】（発行年，論文名，掲載誌・所収書，発行所）

1956・57年「資本の再生産＝流過程と恐慌」神奈川大学『商経法論叢』第6巻第4号，第7巻第3号。

1958年「再生産過程の周期構造—固定資本の再生産の矛盾を中心として」神奈川大学『商経法論叢』第8巻第3号。

1959年「信用と恐慌」神奈川大学『商経法論叢』第10巻第4号。

1959年「『資本論』における恐慌理論の基本構成」（宇高基輔と共著）『土地制度史学』第4号。

1960年「恐慌・循環分析の問題点」『経済評論』（12月臨時増刊号）日本評論社。

1962年「恐慌理論一点描・研究の系譜と動向」渡辺佐平編『論争・現代の経済理論』日本評論新社。

1962年「帝国主義に関する諸学説：a レーニンの帝国主義論 赤松要・堀江薫雄・名和統一・大来佐武郎監修『講座 国際経済』第5巻『帝国主義と後進国開発』有斐閣。

1964年「『帝国主義論』と国家独占資本主義—国家独占資本主義論への序説」『土地制度史学』第23号。

1965年「『高度成長』の性格とメカニズム—戦後再生産＝循環把握への基礎視角」国民経済計算利用研究会資料No.1「戦後循環の分析視角—昭和36年の景気調整をめぐって」経済企画庁経済研究所。

1966年「『資本論』体系の発展としての『帝国主義論』」宇佐美誠次郎・宇高基輔・島泰彦編『マルクス経済学体系』第3巻『帝国主義論』有斐閣。

1969年「アメリカ資本主義の戦後段階—『1963年工業センサス』を中心に」『土地制度史学』第45号。

1970年「アメリカ資本主義の歴史的段階—戦後＝『冷戦』体制の性格規定」『土地制度史学』第47号。

1973年「「資本輸出」の戦後＝アメリカの段階—米商務省『1966年世界企業センサス』から』『土地制度史学』第60号。

1974年・75年「戦後資本主義世界再編の基本的性格—アメリカの対西欧展開を中心として」法政大学『経済志林』第42巻第3号，第43巻第2号。

1975年「戦後資本主義世界再編の基本的性格—米商務省「1966年世界企業センサス」の整理＝加工を中心に」古川哲・南克巳編『帝国主義の研究』日本評論社。

1976年「戦後重化学工業段階の歴史的地位—旧軍封構成および戦後＝『冷戦』体制との連繋」編集/島泰彦・宇高基輔・大橋隆憲・宇佐美誠次郎『新マルクス経済学講座』第5巻『戦後日本資本主義の構造』有斐閣。

1977年「山田盛太郎『日本資本主義分析』（文庫版）解説」岩波書店。

1981年「山田先生と戦後段階＝鉄鋼分析』『土地制度史学』第93号。

1986年「「冷戦」体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義—ME化とアジア化を軸線として」1986年土地制度史学会秋季学術大会『報告要旨』。

1991年「湾岸戦争と国連帝国主義—現代『ボナパルト』考」経済理論学会・湾岸戦争即時停戦アピール有志の会『湾岸戦争を問う』勁草出版サービス。

1994年「ME＝情報革命の基本的性格—『ポスト冷戦段階』への基礎視角」慶応義塾大学『三田学会雑誌』第87巻第2号。

1995年「冷戦体制の解体とME＝情報革命』『土地制度史学』第147号。

## 2【主な報告】（1996年以降の「ネット新世界論」を中心に）

1996年「2つの新世界—情報化の現段階によせて（どう読むか）」千葉大学法経学部。

1997年「グローバリゼーションと資本主義のゆくえを考える」（レジュメ2枚）基礎経済科学研究所。

1999年「ポスト冷戦10年の経済的帰結—情報革命と金融革命の世界史的連繋に着目して」（レジュメ6枚，表3枚。「ひとつの歴史図式〈アメリカに

視点をおいた」1枚。「(参考) 20世紀末におけるNetベースの情報=金融《新世界》の形成史の整序ための一試論」レジュメ2枚) ポスト冷戦研究会。

2001年「情報革命の歴史的位相—インターネットの生成史に照らして」(レジュメ3枚, 図式「冷戦の論理の科学〈コミュニティ形成〉の論理への転轍, とらえかえし: Net生成の基調—旧3C〈command-control-communication〉の軸から新3C〈communication-collaboration-community〉=主体形成基軸への弁証法的転化」1枚) ポスト冷戦研究会。

(以後, 2001年報告レジュメ・図式の増補改訂)

2002年「情報革命の歴史的位相—インターネットの生成史に照らして」(2001年) 改訂版 (レジュメ9枚, 資料2枚)。

2003年「ひとつの歴史図式(1999年) 増補および補足「『20世紀末大旋回』把握をめぐる議論の素材提供までに」(レジュメ4枚)。

2005年「情報革命の歴史的位相—インターネットの生成史に照らして」改訂版(2002年) へのふたつの追補(レジュメ4枚)。

I 2002年レジュメ9枚目の末尾「追記」のあとへ, 「日本資本主義戦後段階—再審のための1視点(『格差問題』への回帰)」

II 2002年資料の(2)「ひとつの歴史図式」への補足(2003年)によせて, 「再び『新しい世界』としてのNetの基本性格, それが開く人類史的過渡期としての現代世界の位相について」

謝辞: 本稿の作成にあたり, 南克巳氏のご遺族と安孫子誠男氏(千葉大学名誉教授)のご協力を得た。記して謝意を表したい。

## 〈引用・参考文献〉

- 石井寛治（2015年）『資本主義日本の歴史構造』東京大学出版会。
- 柿崎繁（2016年）『現代グローバリゼーションとアメリカ資本主義』大月書店。
- 北原克宣（2017年）「マルクス経済学の現代的課題」五味久壽・元木靖・苑志佳・北原克宣編著『21世紀資本主義世界のフロンティア経済・環境・文化・言語による重層的分析一』批評社。
- 後藤康夫（2004年）「戦後生産力の独自の性格—情報革命とグローバリゼーションへの展望—」福島大学国際経済研究会編『21世紀世界経済の展望』八朔社。
- （2011年）「21世紀型危機からネット新世界への主体・歴史・理論」基礎経済科学研究所編『世界経済危機とマルクス経済学』大月書店。
- （2013）「2011年グローバルな占拠活動の人類史的意義—フクシマと世界を貫くネット新世界，主体，そして変革像—」経済理論学会編『経済理論』第50巻第1号。
- （2017年）「書評：五味久壽編『岩田弘遺稿集』」経済理論学会編『経済理論』第54巻第3号。
- （2019年）「『経済学と歴史認識』解題（「意義」を担当）」平田清明記念出版委員会編（編者：八木紀一郎・山田鋭夫）『平田清明著作 解題と目録』日本経済評論社。
- （2020年）「2011年のグローバルな運動とフクシマ—未来からの合図—」後藤康夫・後藤宣代編著『21世紀の新しい社会運動とフクシマ—立ち上がった人々の潜勢力—』八朔社。
- 藤田実（2021年）「ネット段階の資本主義経済と社会変革への展望」経済理論学会編『経済理論』第58巻第2号，桜井書店。
- メイソン，ポール（2017年）Paul Mason, *Post Capitalism: A Guide to Our Future*, 2015 佐々とも訳『ポストキャピタリズム—資本主義以後の世界』東洋経済新報社。
- 矢吹満男（2019年）「ポスト冷戦30年の政治経済的帰結—南理論の再検討を踏まえて—」ポスト冷戦研究会。
- 山田盛太郎（1977年）『日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程把握—』岩波文庫版（解説は南克巳。原著発行は1934年）。

MINAMI Katsumi's Theoretical Contribution to  
Marx's *Capital* in the 21<sup>st</sup> Century

Yasuo GOTO

《Abstract》

The aim of this paper is to publish MINAMI's manuscripts, with a plan to edit his main articles into a single book with comments by the author.

MINAMI's analysis of Post-Cold War capitalism based on the Internet lead to the prospective conclusion that we are leaping into a new world and entering into a transition period in human history, which is just the beginning of the net-based mode of production opening up 21st century communism (the association of free individuals).

This thesis is a creative embodiment of Marx's futuristic concept, general intellect(Allgemeine Arbeit), having been adapted since MINAMI's article in 1969. In just the same year, the initial form of the Internet, Arpanet, was born.